

池ができれば次は植物か。池に合う植物を探していたら、お隣で増えて持て余しているクレソンを整理するとの情報をもらって、さっそくいただいてきた。急な話だったのでとりあえず、池の端に植え込んでみた。

でもやはり本命はスイレンだろう。さっそく庭木や野草を売っている園芸店に相談にいった。店のひとも庭の池はイメージできるが、原野に掘って作った池で育つスイレンとなるとあまり自信がなさそうだったが、少し小型のスイレンのヒツジグサならなんとかなるかもしれないとのことだった。ただ、水深は最低でも三十センチメートルはないと冬越できないのではないかと言われた。それも手に入るのは六月末になるという。がっかりした表情を読み取られたのかエンコウソウという黄色の花の咲く水辺を好む植物をおまけにくれた。

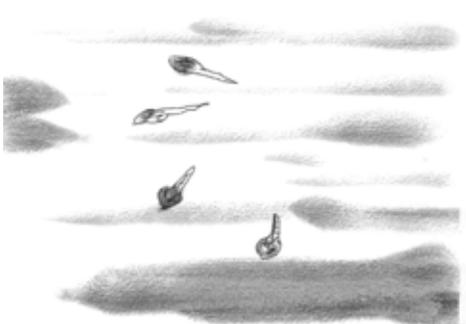
さっそくエンコウソウを岸辺に植たが、ヒツジグサを植えるのはそう簡単ではなかった。一旦通水した池を三十センチにヒツジグサを植える深さをプラスしたところまで掘り下げるのは容易ではない。まずは股まである長靴を調達し池に入ってみたが、足を入れて移動するたびに底の土がかき回され水がどんどん濁ってしまう。池の底にスコップを突き立ててもどこがどう掘れているのか確認ができない。それに大きな石に当たることも一度ではない。ここは原始的試行錯誤ではなく、周到に計画して臨むべきだったと反省した。

六月末によく色の違う三種のヒツジグサの株を手に入れることができたが、店のひとが言うにはそのまま土に植えても浮力で株が浮いてくるので、石をくりくりつけるなど重りが必要だとのこと。これも通水前ならやりようがあったがさてどうするか。結局、ハンギングバスケットの網にシュロを敷き、そこに苗と土を入れ、最後に上に重しの石を乗せてバスケットごと沈めることにした。バスケットをつるすチェーンを持ち上げながら静かに目的とする場所に沈めると、これが意外とうまくいってなんとか池におさまってくれた。

川と池を掘った頃は一面茶色のモノトーンの世界だったが、五月になると水辺も淡い明るい緑色に変わってきた。そして六月に入ると早々にクレソンの白い花が咲き始めた。それを追うように六月の半ばにはおまけにもらったエンコウソウが黄色の花を咲かせた。こちらの春ははじめはあまり彩がないなかで、白い花と黄色い花が点々と咲く姿は心を和ませた。七月に入ると六月の末に植えたばかりのヒツジグサも負けじと花を咲かせた。

池の水も暖かくなってきた。アメンボウやミズスマシ、そして長いオールで泳ぎをするのマツモムシなど、水中昆虫の種類と数が一気に増えてきた。それにトンボも灰色のシオカラトンボや細身で鮮やかな青のイトトンボ、時には大型のオニヤンマまで池の水に惹きつけられてきた。

いち早く「石塚さんのいえに池ができたよ。」と生き物通信にのったのだろうか。八月に入るとオタマジャクシがいっぱいいるのに気が付いた。卵を見た記憶がないのだが、そもそも池をつくって数ヶ月でカエルが卵を産むなんて想像もしていなかったので見落としたのかもかもしれない。



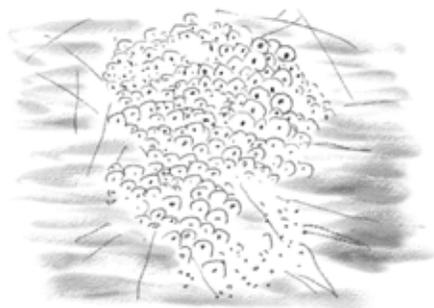
オタマジャクシの姿を見たその日から、オタマジャクシの成長を見るのが日課になった。まるで小学生の夏休みの成長間観察みたいだが、それを自然の状態で観察できるのは嬉しかった。最初に見てから十日もたったころオタマジャクシに足がでてきた。さらに十日後にはすっかりカエルらしい姿になってきた。そのころになると立派なカエルが姿を現すようになった。親ガエルが子どもの成長を見届けに来たのかなとも思ったが、大型と中型のカエルの二種いるのが気になった。

と、数日経つとあれだけいたオタマジャクシの姿がよくよく探さなければ見当たらなくなってしまう。急にカエルとして自立したとは思えない。あまり想像したくないが子どもは成長を見届けに来た親ガエルと思ったのは、単に腹を空かせたカエルだったのではないだろうか。ずっと成長観察を続けて来ただけになんともいえないエンディングだ。今になって振り返ると、オタマジャクシはこの小さな池でも常に過酷な生存競争に晒されていることがわかる。翌年の四月の初めに今度は立派なカエルの卵を見つけた。四月の半ばをすぎると卵の中心の黒い勾玉状のものがモゾモゾ動き始め、その数日後にはオタマジャクシとなり泳ぎ始めた。昨年のオタマジャクシより小さく別の種類のカエルなのかもしれない。今度は成長を見届けようと思ったが、それから数日したら姿が見えなくなってしまった。さらに次の年は、同じく四月の中旬に卵を見つけたが、それはオタマジャクシになったのを見ることなくいつの間にか消えてしまった。この三年間で一匹でも生き延びてカエルになり卵を産みにこの池に戻ってくるのができればと思ってしまう。

さて、話を川と池が完成した年に戻そう。夏の暑さがようやく収まって来た頃、池のまわりは草ぼうぼうの状態で何がはえているのかわからなくなっていた。そんなとき、池の水の中から細い葉をもたげているのが目に止まった。他とは違って少し肉厚の細い葉はガマのそれと思われた。もし、そうだとするとこの敷地から姿を消したのが、私が川と池を掘ったことよって蘇ったということになる。それも掘ってからわずか半年足らずのことだ。川上から種が流されて池に落ち着いたのか。それとも、じっと地下でまた環境が変わるまで身を潜めていたのか。いずれにしろその復元力には驚かされた。

そもそも川と池を掘ることを決めた大きな理由は、水辺が無くなったことによる植生の変化をもう一度再生し多様性のある場所にできないかということだった。それが自分たちの手でスイレンを植えたりなんだりしている間に、水で暮らす昆虫が集まって来て、水辺を産卵場所にするトンボやカエルも目ざとくやってきて、ついには姿の消えたガマがもどってきたのだ。それも半年という短い時間で。

粘土質の水はけの悪い土地だったこともあり、いわゆるガーデニングを自らやることには関心が無かったが、植物を植えるのではなく環境に若干手を加えることで生まれてくるランドスケープを楽しむことをできればと思った。



川と池ができて二年目の四月の末に大雨が降った。前の日から降り続いた雨は朝になってもまったく止む気配が無く、池は中之島も形を失い、大きさも二まわりも大きくなったかと思えた。氾濫の状況を確認しようと二階の窓から池を見ると、なんとそこには二羽のカモが巣しそうに泳いでいる。色姿からオスとメスであることがわかる。わたしたちの池にカモが。家の中から息を潜めて観察していると、カモたちは池から川を上流に泳ぎ始めた。時々、オスが水から上がり、メスが川を泳ぐのを見守ったりしている。ちょうど、家のまえの畑の脇を通り過ぎてしばらく行つたところでUターンして池に戻ってきた。確かに上流は細かに曲がりくねって勾配も急になるのでカモには泳ぎづらかったのだと思う。結局小一時間居た後、飛び立って行つた。

池を掘ってトンボやカエルがやって来たのはなんとなく想定範囲だったが、まさかカモまでやってくるとは。そもそもどうやって知つたのか。空から見てなのか、水の匂いを頼りにかそれはわからないが、小さな川と池と思つて居たが、自然界では立派な水辺として認識されたと言つて良いのではないかなんせ、カモはその時だけでなく十日後にもまたやって来たのだ。さすがに、ここに巣をつくる決断はしなかつたようだが、それでも大したことだ。

六月に入ると、池に黒いものが泳いでいるのが見えた。そのシュツとした姿はオタマジャクシではない。池の端の草に身を潜めて観察していると、それは紛れもなく魚だった。それも一尾だけでなく、少し大きめのが二尾、中くらいのが三尾そして小さいのが二尾と結構な数だ。それこそ上流から流れて来たのかも知れないが、ついに魚が放流もせず池を泳いでいるのを目にすることができたのだ。ただ、これもオタマジャクシの時のようにいつの間にか姿を見ることができなくなつてしまつた。

同じ六月の下旬には池の周りに地面を掘り返したような跡が見られた。明らかに獣の仕業と思われたが一体誰だろう。さつそくおもちやのような暗視カメラを手に入れてセツトしてみた。最初に日は何も写つていなかったの、少し場所を変えてセツトしてみたが、それでも成果はなかつた。やはりおもちやではダメかと思つた三日目、何かが写つていた。白黒動画でさらに気温が下がつてモヤのかかつたような画像だったが、尻尾の縞模様はアライグマと思われた。続けて同じ場所に翌日もセツトしてみたら、今度はモヤが発生していなくて鮮明な画像が記録されていた。

おもちやカメラなので生き物の温度を感知してから録画が始まるタイミンが遅く近づいてくるところは写つてなくて、突然、池の中之島に掛けた小さな橋からぬつと顔を出してこちらに近づき、それも二匹。いや、三匹、いや、四匹。つぎつぎと池の方から出て来て木道に濡れた足跡をつけていった。親とおぼしき大きいのがしきりにカメラの匂いを嗅いでいる。そのうち視界から消えたのだが、子供たちに手洗いを教えていたのか。アライグマは農家も困るやっかいものだが、その後は警戒して姿を見せなくなつた。

